

高知県子どもの環境づくり推進委員会 子ども委員・OBOGによる座談会 概要

1 日程及び議題

日 時：令和5年8月26日（土） 14：00～16：00

場 所：帯屋町チャコール 2階 帯屋町教室

テ ー マ：

- ①子どもたちに自分たちの住む町の暮らしや、それに繋がる選挙に興味を持ってもらう方法
- ②不登校の子どもたちの置かれている環境から考えるあったら良いと思う環境

2 会議の概要

テーマ①子どもたちに自分たちの住む町の暮らしや、それに繋がる選挙に興味を持ってもらう方法

【Aグループ】

- ・友達と政治の話をしていて、友達が議員の名前を知らなかった。その際、「自分たちの暮らしに繋がることなのに、どうして興味がないだろう。当事者の目線は大切であると思うのに。」と思った。どうしたら友達に興味関心を広げられるかを聞きたい。自分からは、積極的に話しているつもりではあるが。
- ・18歳未満の子どもたちに「町の暮らしって何？」と聞いても難しいんじゃないかと思う。なぜなら、自分たちの住んでいる町が何をしているのかを理解できていないから。理解するためには、議員が学校で講演会をして、自分たちこの仕事や選挙について子どもたちに伝える機会があればと考える。
- ・学校の授業で、校区内の地域について調べる機会があった。その際、校区内に住んでいる友達に話を聞くと、知らないと言っていた。自分自身も住んでいる地域について考えてみると知らないことが多かった。そのとき、どうしたら子どもたちが自分の住んでいる地域について詳しくなるのかを考えるようになった。
- ・18歳から選挙行けるようになったが、選挙会場に出向き、投票するというハードルが高いと感じている。そこで、若者が使っているSNSを活用し、投票したことをSNSに投稿すると、地域のお店などで割引を受けられるという仕組みがあってもよいのではと考えた。興味関心にも繋がるのではと考える。
- ・オンラインで投票できたらと思う。
- ・オンライン投票は良いと思う反面、気軽にできることで、1票の価値が下がってしまうのではないかと考える。
- ・若者が今一番何に興味があることと選挙を上手くマッチングしないといけないと思う。わからないから動いてない人たちをいかに動かすかという視点が大切ではないかと思う。SNSを活用することは、これからの時代、当たり前になってくるのではないか。
- ・どうしてこのテーマに興味があるのか、また、どうして熱意を持ってこの状況を変えたいと思ってくれるのかを、自身から発信してもいいのではないかと思った。
- ・子どもの頃は、親に育てられる、与えられる立場であるため、社会の状況の変化について、間接的に影響を受けている。そのため、子どもたちは社会の状況の変化に気づきにくいと思う。

- ・子どもたちが当事者意識を持つことは難しいと思う。
- ・僕は、両親が新聞を読んでいるのを見て、初めは真似をしていた。そこから、興味のある部分を読み出し、その周辺にある記事も読むようになり、興味を持つようになった。
- ・友達とゲームの話はできるのに、町の暮らしの話ができないことに変な感じがする。
- ・SNSを活用してという話があったが、SNSは、その人の興味関心がある情報がおすすめされるようになっているため、興味のない人へは届かないのではないか。
- ・地域の中で、政党と地域住民による座談会があり、参加したことがある。また、通学中に演説をしている人と話をする機会もあり、選挙や町の暮らしに興味を持つようになった。
- ・実際に様々な活動がされていても情報が届いていないことがあるのではないか。
- ・子どもたちは、情報の取捨選択が上手いというか、興味のある話しか目にならない環境に置かれてると思う。検索したら出てくる環境。
- ・座談会の情報はどこから流れてくるのか。純粹に町の暮らしについて話す場を見たことがない。地域性にもよるのだろうか。
- ・選挙運動をする車をうるさいなと思い、親に話を聞くと、選挙について説明してくれ興味を持つようになった。
- ・周りの大人の影響は大きいのではないか。
- ・こどもと周りの大人の関わりがキーワードになりそう。また、興味関心を持つきっかけがあったことも大きかったのではないか。
- ・興味関心を持つきっかけとして、著名人の立候補などもあったと思う。
- ・ここに来ている人たちは、大人と関わりたいという意識高く、その分影響を受けていると思う。だから、周りとのギャップっていうか、温度差を感じてしまうのだと思う。
- ・子どもたちにとって、選挙に行ってもよかったと直接的に感じるメリットがないのではないかと思う。今は、投票に行ってる人の年齢層が高いから、その層に向けての政策が多く、子どもたちが何かメリットを感じる部分の政策が少ない、イコール投票に行っていないのではないか。
- ・選挙運動をする車など、大々的にやっているものは、すべて大人目線のものが多い。
- ・大阪では、地域に興味を持つきっかけとして、地元の中・高生が一緒になって、産地のものを売り出すなど商店街を盛り上げる事業をしている。
- ・地域のを高校生が売り出すという事業は見かける。ただ、意欲的にやっているのか、先生に言われてやっているのかは様々であると思う。
- ・選挙に行くことだけでなく、動いた先の情報収集能力が大切であると思う。
- ・割引券を配って選挙に行ってもらうのは違うと思う。自分たちの暮らしがどうなるのかが上手く伝われば、投票率は上がると思う。
- ・模擬裁判のような形で体験しながら勉強することで、楽しみながら学べるのではないか。教育の面から工夫することも大切であると思う。
- ・生徒会長を決める時に実際の投票箱を使って決めたことがある。
- ・中学校の頃の国語の授業が楽しかった。解説から始まるのではなく、まずどのように考えたのかを聞いてくれる授業スタイルだった。受け身が多くなると、主体的に考えることが弱くなるので

はないか。

- ・大学では、主体的な授業が多くなる。好きなことだけを学べる環境だと、偏りも生まれるので、受け身の授業も必要ではあると思う。

【B グループ】

- ・地域の文化活動や体育活動といった場に参加することで、自分の町の暮らしや選挙への関心に繋がるのではないかと。また、そういった機会があることを知ることも大切である。知る機会は、自分でアンテナを立てておくことと同時に、選挙管理委員会や町の広報などでの案内も非常に重要になってくると思う。
- ・このような地域の活動の場に参加する若者が少ないことを課題としている。若者の参加を活性化させるために、どのようなところに魅力を感じて参加するのかをお聞きしたい。
- ・「要望を伝える」「要望を叶える」ということについて、要望というのは、自分が困ってることや、課題に感じていることがスタート地点となっている。困ってるからこうしたい、こういうものが欲しいからこういう場を作りたいというニーズがないと、内発的には出ないと思う。
- ・政治などへの若者の無関心が問題視されている。こどもたちは、無関心でいられても無関係ではいけないと思っている。自分が置かれてる環境や将来の選択はすべて、今の政治が自分たちに関係しているが、関係していることを感じられないような社会のつくりになっていると思う。大人に決められたことをこなしていただくだけのこどもがすごく多いと思っている。これは、こどもたちだけの責任ではなく、社会の作りや教育制度などに問題があると思う。「興味があることに没頭する」「疑問に思うことを追求する」「不快に思うことをきちんと伝える」というような人間としての根本的なところが、自己決定に繋がっていくと思う。そして、その自己決定をする時に「もうちょっとこうだったらいいな」というニーズが出てきて、社会参画したいなっていうところに繋がっていくと思う。
- ・「18歳になったので、選挙に行きましょう」というだけでは、行かないだろうし、「行ったって何になるの?」と思うだろう。速攻性はないけれど、抜本的に変えていくには、幼い頃からの社会との関わり方を、皆が勉強しなければいけないと思う。
- ・一番最初に要望実現する機会が18歳の選挙権が与えられたときというのは、遅いと思う。学校の中には、学生たちが、意見を伝える場として、生徒会などがある。
- ・現在、生徒会に所属しているが、意見が通りづらいと感じている。例えば、LGBTQの関係で体操服の色を男女別とするのではなく統一するのはどうかと提案すると、PTAや先生の間で、何回も協議が必要である。
- ・生徒総会では、毎年校則について意見が出るが、結局先生につぶされるみたいな印象をこどもたちは持っていると思う。当たり前とされている社会の常識を疑うことや立ちどまるという機会がたくさんないといけないと思う。LGBTQの視点からの体操服の色の提案などすごくいいと思う。今は、公立中学校でも出席番号や学級写真の撮影など、本当に必要がないものを分けないようになってきている。そのような視点は若いこどもたちの方が気づけると思うので、発信して欲しい。その発信に「確かにそうかも」と思える大人が1人でも多くないと、「せっかく出した意

見がつぶされた」と感じてしまうと思う。そうなると、「じゃあ次これを出そう」という気持ちにならないだろう。

- ・学校の先生は多忙であると言われている。そういう状況で、面倒くさいということもあるのではないか。
- ・他の学校はやってないという理由で、先行事例になりたくないということや、横並びでいきたいということもあるのではないか。
- ・大人の考える「大体こころ辺」というところに入らないと、話を聞いてくれないというのはすごくもったいないと思う。大人がもっとその枠を広げてあげないといけないのに。
- ・新しいことに挑戦する際に、前例がないと難しいのかなと感じている。新しい挑戦にはリスクがあるが、そのリスクから利益を出さないといけないから。
- ・経済が発展している時期は、「改革しよう」「リスクはあるけど何かチャレンジしよう」というような風潮があったが、今は変化を好まない風潮があるように感じる。
- ・学校では、「去年もやっていたから」「学校はこれが当たり前だから」ということがあり、疑問に感じている。生徒会においても、「結局先生が決めるじゃん」とこどもたちが思ったら、生徒会に入ってこんなことがしたいという気持ちがなくなると思うので、とてももったいないと思う。
- ・公立と私立でも費用の面などから、できることに差があるのではないか。
- ・コロナ禍により、学校行事ができなくなったり、さまざまなことが制限された。今は、徐々に元の生活に戻っているが、コロナ禍前のようなパワーはなく、一段階縮まっているように感じている。
- ・私立高校だから自由にできるということはあまりないように感じている。学科によって温度差があったり、学生生活も全く違う。その関係で、生徒指導部の先生が行事を準備しているが、去年のままではなく、工夫して欲しいと思う。先生にとっては、学校行事は毎年あるが、学生にとっては、一度きりである。また、先生はコロナ禍の学生生活を体験していないが、学生にとっては、コロナ禍でできなかった行事が多い分、貴重な1回である。コロナ禍により生徒もやる気がないというか諦めているように感じる。私立高校はもっと盛大に学校行事ができると思うのに、行事も少なくなっているし、良さがなくなっているように感じている。
- ・スケールダウンした現状に、今のままでいいのではないかという人もいる。町の暮らしや選挙についても同じことが言える。「投票しなくても勝つべきところが勝ってなるようになる」というような、積極的に暮らしに携わっていかうとか、意見を伝えていかうとならない方が多い。生徒会は一つ良い場やと思うので、消極的な人も巻き込んでいくような経験をして欲しいと思う。
- ・コロナ禍により、有無を言わずマスク、消毒、人と距離を取るというように、こどもたちの人権がないがしろにされたなと感じている。幼児教育では、こどもと密で表情を見せることが大切だが、その逆での環境となり、今しかできない思い出づくりや、今しかできない関係づくりができない状況になった。基礎疾患がある方にとっては、感染対策は必要であると思うが、価値感の多様化が全然認められなかった3年間だったと感じている。こどもたちもどうせ行事はないだろう、どうせ変わってしまうだろうという気持ちになっていると思う。マスクについては、こどもたちに表情を見せ、先生から動くことで、外しやすい環境を作っていくようにしている。

- ・マスクを着用することで、自分や相手の身を守ることは分かるが、マスクの付け外しが原因でいじめが起こったり不登校の原因になることは悲しいと思う。
- ・マスクの着用を求めるなら、こどもたちが理解できる説明が必要であると思う。
- ・こどもはおなかの中にいるときから、光で顔を認識するが、マスクは顔を隠すため、幼児教育の時期にも影響する。
- ・校則でもマスクの着用でも、配慮として全てを一括りにするのは違うと思う。配慮とは何かを答えれたらもっと変わってくると思う。
- ・課題の解決方法として、これが問題だからこれを解決するというプロセスを踏むが、感染症については、飛沫が飛ぶ確率を下げるために、これを徹底しなければならないという風に。少しやり過ぎているように感じる。
- ・これが課題だから、ここを解決するだけではいけないと思う。様々な面を見て、対応していかなければ、一部が改善されてもその他でバランスを崩してしまう。
- ・課題解決をするにあたっては、それを主張した人たちだけで作っていくよりは、別の視点での意見も求めて、作っていくことが大切である。
- ・若者に、「政治に関心を持ちましょう」と言っても、学生は学校や部活、習い事などで忙しく、働いている世代や子育て世代も子育て、仕事、趣味などで毎日忙しく動いている。そこで、学校の授業で取り入れることや、レジ袋にお金がかかることなどの日常生活が全て政治と繋がっているという意識を幼い頃から持つことが大切であると思う。
- ・こどもたちの意見や発言を「こどもには関係ないから」「こどもだからわからないでしょ」と言うのではなく、こどもも1人の人として意見を尊重し、受け止めてあげることが大切であると思う。
- ・20代30代の人が皆投票をしても、61歳以上の人口の半分にも満たないと聞いたことがある。それを聞いて、政治に参加をしても、結局、意見が反映されにくい環境にあるのではと思った。選挙制度自体を変えないと、反映されにくいのではないかと考える。
- ・年齢層で投票の比率を出して、その結果が見えるようにしたら良いのではないか。
- ・そういう発想を大切にしたいと思う。
- ・若者は、マスコミの報道だけでなく、インターネットやSNSで様々な情報を調べることができるのは強みだと思う。

テーマ②不登校のこどもたちの置かれている環境から考えるあったら良いと思う環境

【A グループ】

- ・不登校になる生徒の40%が発達障害のこどもたちであるというデータを見た。こども一人一人の特性に併せた「学校」以外の居場所があってもよいのではと思った。
- ・不登校と聞くと、いじめや周囲の環境が影響しているのではないかと考えた。幼児期の発達、周囲の人の影響を受けるので、一人一人にあった環境を周囲の人が考えることは大切であると思う。
- ・教員として、不登校がこの10数年ですごく増えた印象を受けている。10数年前は非行などにより学校に来ないこどもたちが多かったが、今は発達障害が要因ではないかと感じることが多い。
- ・発達障害については、1歳6か月健診という法定健診の際に、支援が必要かなという子には、チェックがつくが、親は自分のこどもに変なレッテル張られたくないという思いから、支援を受けるチャンスから落ちることがある。そして、成長過程で本人がもうどうしようもなくなって不登校になることがある。中学生くらいになって不登校が急に発生するわけではなく、幼い頃からそういうサインがたくさん出ているが、周囲の人が受け取ってあげていないことも要因である。個性として認めることは大切だが、アプローチの方法が余りにも少ないことで、その後のこどもへの影響が大きいと考える。
- ・不登校について、どの講座受けても、不登校になった原因を自分ではっきりわかってる子はかなり少ないそう。現場でも同様の印象である。自分を認知できてないということは、発達にちょっと凹凸があることが多いのではないかと思っている。
- ・こどもたちが出すサインをしっかりとフォローしていくために、1歳6か月児、3歳児の法定健診などで、行政が入るチャンスがたくさんあると思うので、保護者が心開いて、行政も入っていけるような環境づくりが必要であると思う。
- ・正直、中学校で不登校になると、即効性がある方法はない。地道に少しずつ突破できる場所を探していくことしかない。幼い頃から自分の意思決定ができる場を安心して提供してもらえたり、困難に差し掛かった時にそれを乗り越える力や、誰かと協力して解決する力を身につけられるような経験が必要であると思う。最近、余りにもそういう場の提供が少ないと思う。
- ・不登校の子の居場所づくりとして、様々なNPO法人などが、いろいろ活動してると思う。南ヶ丘には、東京コーヒーというご飯を作ったり、物づくりをしたりする場所があるが、こういう場所が増えて欲しいと思う。
- ・通信制の高校への進学希望者が全国的に増えており、朝学校へ行って夕方に帰るといった学生生活をしてる人が、少し減ってきているという印象である。不登校を解決することも大事だが、学校の通い方が多様化しているという視点も必要であると思っている。
- ・現在、学校の探究活動で、「不登校と学校教育のコミュニケーション」について研究をしていて、不登校がどうして増えてきているのか。また、どういった要因で不登校になっているのかを研究したいと思っている。
- ・いろんな事情があって、学校に来れない子や途中から来れなくなる子はいる。学校ではない学びの場としては、フリースクールがある。実際に週に何日かは学校に来て、フリースクールにも通

っている子がいる。また、学校には登校するが、別室で勉強をする子もいる。

- ・大阪には、フリースクールが地域にたくさんある。都会には割とあるほうではないかという印象であるが、高知県はどうだろうか。高知県は学校同士の距離が離れているが、フリースクールについても少数しかない場合、そもそも学校に通いづらい子どもたちが、通えるのか。結局、引きこもってしまうのではないかと感じる。
- ・私の親しい友人や自分自身に不登校という経験がなかったので、皆さんの意見を聞いて衝撃というか、整理ができていない部分があるが、今考えてみたら、中学校に1回も登校していなかったような子がいたが、あの子はフリースクールとかに通っていたのだろうかと考えた。
- ・大人はたくさん経験とか知識があるが、高校生は感性が豊かだから、そんなに比べなくていい。「わからない」ということもとても大事だと思う。その時は何にも思わなかったけど、今改めて考えているということがいいことだと思う。
- ・高知県にフリースクールは少ないと思う。中学校で授業が終わった後、学校で行うフリースクールがあったり、高知市では、アスパルこうちというところの中にある教育研究所に通う子どもも多い。自転車で通えない子どもたちは、親が仕事を休んで、送り迎えをしている。また、行っても1〜2時間程度のところが多い。
- ・開所日も毎日ではなく、週に数回程度が多い。
- ・非行は、今日は〇〇をするという目的があるが、ただ目的がなく家にいるという子どもたちが心配である。学校に行ってもらいたいと思っている親は、学校に行ってもらいたいけど、どうして行かないのだろうと思って心配したりイライラが溜まって、親子関係もすれ違っていく。
- ・一昔前は、不登校の原因を掘り起こして、その原因を取り除こうという姿勢であったが、最近では、原因は本人にもわからないし、一つではないという考えのもと、こどもに何かしてあげるのではなく、こどもが持つてる力を育て、伸ばしていく支援のあり方に変わってきている。
- ・コロナ禍により不登校だけでなく、言語の発達が遅くなっているという話を聞いた。
- ・思考力が今の子どもたちは弱いのかもしれない。
- ・思考力については、例えば公園に行って、雲梯があったとき、大人が遊び方を教えることもできるが、こども自身に遊び方を模索させてあげたり、アリを見つけた時に、どんな速度なのか、何匹いるかなどをじっくりと見させてあげることで、何かに没頭する力が付いてくる。
- ・今ある仕事のほとんどが、AIに仕事取られて、何十年後に何%かの仕事がないなど、社会が変わってきている。ただ、学校教育は順応していないように感じている。不登校の子どもたちや親にも多いが、「とりあえず普通高校に行く」というような、「中学校を卒業したら高校行くもの、高校を卒業したら大学か専門学校に行くもの」という人生のルールを皆がイメージしてる。特に高知は多いのではないかな。多分、都会だったら、若いうちから起業をする子ども多いと思うし、今後はそれがスタンダードになっていくのではないかな。ただ、学校教育では、そういう力を身につけられていない現状である。義務教育でも自分の力で生きていける力を身につけることは必要であると思う。こういう現状だから、不登校もネガティブな印象はあるかもしれない。この状況で学校を学校に行かないという選択肢をする不登校もいると思う。不登校といっても一括りにしてはいけなさと感じている。

- ・不登校の子どもたちには、家だけではなく、習い事や祖父母の家など、社会とつながれる場所が一つでも多い方がよいと思う。居れる場所が多いほど、いろんな面が見えてくるから。
- ・県外で、子どもに関する事業を立ち上げるに当たって、NPOとかの人たちが、「こういう事業を立ち上げたいんだけどお金の面はどうしたらいいんだろう」などを話し合っていた。ノウハウを持っている人たちが周りにいることでこういう事業が派生していくと思うが、高知県のようにあまりない状況ではそれも難しいのではないかと感じた。
- ・田舎あるあるではないかと思うが、新しいことをしようとすると、変な目で見られることがある。不登校イコール悪とか、悪いことと思ってる人たちが多く中で、不登校のために場所を作らしようというような活動をする、変なことしてると思われると思う。是非、若い世代やすごい活発な人がこのような事業をしてほしい。すごく魅力がある場所や仕事になると思う。
- ・不登校を悪と捉えるのは、大人だけなのではないかと感じる。学校に数人は不登校がいて、それが当たり前だったので、悪いこととは思わない。
- ・私も悪とは思わないが、SNSで「私は毎朝学校へ行って、やりたくない勉強をしてるのに、不登校の子は好きな時間に起きて、好きな時間に食べて、ゲームもできていいよね」という投稿を見たことがある。同級生の中にはこのような考えの人もいると思う。不登校に子がこのような内容を見ると傷つくだろうなと思った。不登校とインターネットについても繋げて考えないといけないと感じた。
- ・子どもたちが悪と捉える理由として、不登校の子が久しぶりに学校に来た際に、周囲は配慮をしていたが、その子にとっては居づらい環境であり、その点を周囲が注意された際に、「普段来ない方が悪いのに」といったようなすれ違いが生まれると思う。その時の先生や周り対応によって、悪にもなるし、改善されることもあると思う。
- ・不登校を経験していたが、大人になって周りとは変わらず社会生活してる人は多いように感じる。学校教育という場が居ずらかったのか、自分の発達段階で生きづらさがあったのか、要因はわからないが、多様な子どもたちがいる中で、一元化したシステムでよいのだろうかとも考える。

【B グループ】

- ・調査を見る際は、数値だけでなく、調査に参加してくれた人などの情報にも目を向けて欲しい。事前資料として提供のあった「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」については、「不登校であった者のうち、調査対象期間に、学校に登校又は教育支援センターに通所の実績がある者」と書かれている。ここから、不登校の状態から、学校に通ったり、教育支援センターに行くことができるようになってきた子どもたちに調査をしているということが分かる。
- ・不登校の子どもたちの置かれてる環境から考えるあつたら良いと思う環境というのは、少し学校行ける子たちの考える環境と、行きたくない、行かないと示している子どもたちの考える環境は違うと思う。
- ・1人でも多くの子どもたちに学校に来てもらう、自分なりの勉強の仕方を見つけてもらうためには、すでに経験してきた人はどんなきっかけがあったのかを把握することは大事であると思う。
- ・ICTを活用や、学校に行けない子どもたちのもとへSCやSSWが訪問するということはされ

ていると思う。

- ・ SC や SSW と関わる機会が少ないのではないかと。中・高校生の頃、学校に通って5年目でSSWの方を初めて知った。女子校であったのに男性のSSWであったことにも疑問を感じたし、SSWに相談をするには、保健室の先生を介して予約し、学校の授業を休んでではないと会うことができず、相談する人はいないだろうと思った。
- ・ 行っていない子どもたちへの支援も大切だが、行きたくない状態になりかけてる子どもたちへのフォローとして、SC や SSW の関わりやすさは大事であると思う。
- ・ 中学生の頃は、SC や SSW が休み時間に教室に来ることがあり、見かけたことがあるが、高校では、いるのかいないのかも分からない。私立と公立でも違うのか。
- ・ 私の学校では、学期が終わるタイミングで、全員が15分程度面談を行っている。
- ・ 私自身が教室に入れなかった経験がある。その際、SSW と火曜日会うことを楽しみに頑張っていた。
- ・ 小学校から中学校に上がった際に、SSW が変わらなかったのは良かったと思う。中学校の制服「似合っているね」などの話をしてくれた。
- ・ 私も高校にSC や SSW がいることを知らない。高校に入学して3ヶ月くらいで学校をやめた子がいた。今思うと相談できる機関や人について伝えられていなかったのではないかと思う。
- ・ 「令和2年度不登校児童生徒の実態調査」において「休みたいと感じ始めてから実際に休み始めるまでの間に、どのようなことがあれば休まなかったと思うか（実際にあったことを含む）」という問いに対し、小学生で「学校にいるカウンセラーと話をすること」と回答した割合は、4.8%と、あまり相談したいと思っていないのではないかと感じた。また、「特になし」の割合が高いがなぜだろうか。
- ・ SC や SSW と話す機会があることを知らないからではないか。
- ・ SC や SSW の存在を知ってもらうことが、課題の一つになると思う。
- ・ 相談することによって改善するというイメージがないと、知っていても利用しないと思う。気軽に相談してみて駄目だったら他の選択肢を選べるように、敷居を下げて、選択肢の一つとして認識してもらいたいと思う。
- ・ SC や SSW は、担任の先生とは違い、知らない人という認識だと思う。どんな人だろうということから探らなければならず、信頼関係がない人に自分の心を開いていいのか悩む。
- ・ 保健室の先生の方が信頼関係が築けているのではないかと。
- ・ 休み時間に訪問してくれたという経験は、非常に良かったと思う。そこで顔を知り、定期的に来てくれる存在として認識する。これが相談するための敷居を大きく下げることにつながると思う。
- ・ 大人は、生きづらい環境から抜け出せる手段が多いが、子どもは少ないと思う。例えば、職場でいじめられたとき、大人は転職をしたり、休業したりと、お金を稼いでいるということもあるが、選択肢が多い。子どもの場合は、学校に行けなくなると、相談できる場所やその他の居場所がなければ家にいることしかできない。
- ・ 児童館という学習の場や遊び場として機能している施設がある。幅広い年齢の子どもたちが同じ

空間を使っている。開館時間であれば、学校に通っている通っていない関係なく行くことができる。職員の方が何年も変わらず運営しているところもある。

- ・子どもたちが利用できる施設などをガイドマップのようなかたちで、知識の付いた学生たちが、地域の小さな後輩たちのために作ってあげるというのも良いのではないか。学生のみんがイメージできないことは、若い子どもたちはさらにイメージできないと思う。
- ・SNSやインターネットも逃げ道の一つであると思う。インターネットは怖いと言われているが、正しく使えば便利なものであり、どこからでもアクセスできる。中には、心のうちを文字打つことによって、溜め込んでいたものを吐き出せる人もいると思う。
- ・通信制の小学校や中学校があってもいいのではないか。
- ・夜間中学校という様々な年齢の人が学び直しをすることができる学校がある。徳島県では、大学を卒業した人も受け入れている学校がある。中学生の頃に学校に通えず、学校の雰囲気を味わいたいという方がいるからさうだ。
- ・義務教育だから学校に通うではなく、子どもたち自ら手段を選ぶことが当たり前になればと思う
- ・中学校のころ不登校だった友達が、夜間高校に通っている。最近会う機会があったが、元気そうにしていて良かったと思った。
- ・中学校は義務教育であるため、皆が卒業できるが、義務教育の学び直しができるのはとても良いと思った。
- ・学校にSCやSSWがいたことを知らないが、売店の方と話をたくさんしていた。SCやSSWにこだわらず、様々な大人と交流する機会があればいいと思う。
- ・中学校の頃に校長先生から給食の先生までを一覧にしたものが渡され、「好きな先生」「話したい先生」をアンケートで答えることがあった。
- ・私の学校では、第3希望まで「話したい先生」を答えて、学期ごとに選んだ先生と話ができる機会があった。相談したいことがあるときだけでなく、相談したいことがない場合は、雑談や趣味の話をしてくれた。